正倉院聖語蔵大智度論古点及び央掘魔羅経古点について

築島　裕

正倉院聖語蔵の古訓点資料の中で、大智度論巻第一・二・三・四の四巻、及び央掘魔羅経四巻について加へられた古訓点について報告させて頂くこととする。これらの経巻の訓点についての調査は、昭和五十二年十月及び同五十四年十月の二回に亘り、原本を親しく拝見して行つたものであるが、その折には、正倉院事務所後藤四郎元所長、武部敏夫前所長を始めとする正倉院事務所各位の格別の御高配による允許を賜つたのであり、又、遠藤嘉基博士の御懇情御尽力に依るものであつて、衷心より感謝の意を捧げ奉る次第である。

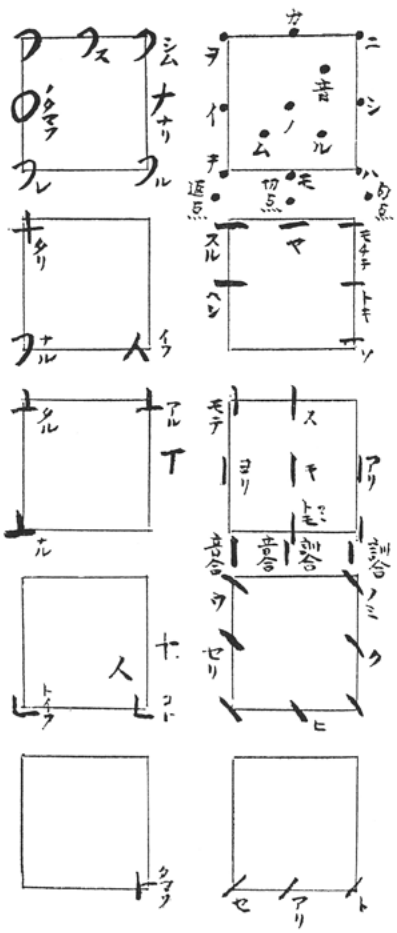
一、大智度論巻第一・二・三・四古点（巻二、巻末図版三）

大智度論百巻は、龍樹の造、後秦鳩摩羅什の訳に係り、摩訶般若波羅蜜経の釈論であつて、大乗仏教の一大百科事典の相を呈するものとされてゐる。今論じようとするのは、唐経第五号と登録された巻子本四巻で唐写名写経の一つである。料紙は薄黄色で穀紙かと認められ、天地は二七・二糎、一紙長は四七・四糎、墨界を施し、界高一九・二糎、界幅一・八糎を算する。薄茶地の原表紙を存し、竹を立て、又、白黄赤紫色交織の紐を附し、全巻裏打修補が施されてゐる。全巻に亘つて、朱書及び墨書による段落の印、合点が加へられてゐる。巻第二の巻首には、墨書の仮名の訓点と導の記入があるが、この墨書は院政期の筆と認められる。一方、四巻全体に亘つて白書の訓点があり、加点識語が無いので詳しくは判明しないが、その内容から見て、加点の年代は、九世紀末（平安初期の終頃）、元慶、仁和年間（八七七―八八九）の頃と認められる。（第一、二図）この白書の訓点は、仮名とヲコト点とを用ゐてゐるが、ヲコト点

第一図　聖語蔵大智度論古点所用仮名字体表

施点であつたことから考へると、本書のこの白点も、東大寺辺で加点された可能性が大であると言へよう。

白点は全般的に淡くて、判読に困難を感ずることが多かつたが、現在までに調査し得た限りで見ると、ヲコト点は、第一群点に属しながら、成実論天長点等他の点と比べて、共通点の少い、若干異つた要素を持つものの如く思はれる。即ち、星点の四辺上及び中央の配置を見るに、左下からテ・イ・ヲ・カ・ニ・ハ・モ及び中央のノについては、天長点と相同じいが、たゞ右中央の星点が、本点ではシであるのに対して天長点はコトとなつてゐる所が異つてゐる。平安初期の第一群点の他例を見ると、根津美術館蔵大乗掌珍論承和元年(八三四)点、聖語蔵中観論(乙種写経第二一七号)古点、法隆寺蔵維摩経義疏古点などは、本点と同じくシとなつてゐる。これは恐らく、コトよりもシの方が、一時期下つた段階を示すもので、平安中期の西墓点等に連続して行く流れの上に在るものと考へられる。一方、一の形の線点を見ると、第三図の如き配置が、成実論天長点を始として右掲の各点本に共通に見られるは別掲の如く、四隅の星点が左下からテヲニハと配せられてゐるもので、「第一群点」に所属し、聖語蔵本(甲種写経第三〇号)の成実論天長五年(八二八)訓点と近い系統にあるものと推定せられる。当時における第一群点の使用された範囲は、東大寺・薬師寺・興福寺等の南都古寺の間に亘つてをり、石山寺本の大智度論の天安二年(八五八)訓点も、興福寺の



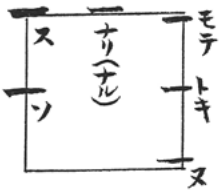
第二図　聖語蔵大智度論古点
所用ヲコト点図(第一群点)

を有するかも知れない。

所用の仮名の字体には、当時の他の古点に見えるものが多く、あまり奇異なものは見出されない。テの仮名である「天」は「天」の行書体の変形であらうが、稍稀な字体であらう。ソの仮名である「十」は訓仮名であり、上代の万葉集にも「八十」の形で見える他、平安初期の古点本の中でも、聖語蔵阿毗達磨雑集論古点(唐経第九号、後掲小林論文参照)や新薬師寺蔵本妙法蓮華経古点などに見えてゐる。しかし比較的珍しい用法であらう。

語彙として注意すべきものが若干見出される。

[ウバラ]　刺(巻第一)
[オツ]　是時婆藪仙人、尋陥入地没踝(巻第三)
[キズ]　創(巻第二)
[シフ]　一切衆生皆盲失目(巻第四)
[タヽク]　刀足指扣(巻第三)
[ナガエ・ヨコガミ]　有无別性、譬如車轅軸転輞輞等(巻第一)
[ノゴフ]　智色知相知刮刷(巻第二)
[ハギ]　蹲(巻第四)
[ハヽクソ]　如白色人雖有黒点子不名黒人(巻第二)
[ホル]　如是憂悩荒迷憒塞(巻第三)



第三図

のであるが、独り本点のみこれと異り、僅に右上のモテ、右中のトキが合致して他はすべて不一致であるといふ性格を示してゐる。とにかく本点と比較的近い点法は、他に未だ見られぬのであつて、独自性の強い点として注意すべきであらう。尚、コトの点として、右下に⌊の形を持っているが、第一群点では、聖語蔵菩薩善戒経古点が右下の⌉の形をコトと訓ませてゐるのなどが僅に近いかと思はれるに過ぎない。知恩院蔵大唐三蔵玄奘三蔵法師表啓古点は、第三群点であるが、これには右上の⌊をコトの点として用ゐてをり、同じく第三群点の石山寺本大智度論元慶元年(八七七)点が東大寺三論宗点に同じく右中央の⌊をコトと訓ませてゐる。西墓点も同じく中央の⌊がコトであり、本点と何等かの関係

［ヤ、モスレバ］　世間人心動ヤ、モスレハ愛好福報果（巻第一）

右の内、ウバラは後世のイバラの古形であり、平安初期の西大寺本金光明最勝王経古点・大智度論天安点などにも同形が見えるが、平安時代の古点の中では、別にヲマラ・ハラ・ムハラなどの異形も見えてゐる。ヤ、モスレバは、古く音便を起してヤ、ムズレバの形をも生じた語であるが、右の例はその原形を示すものである。ナガエ・ヨコガミは和名類聚抄に見えるが、本点の例が現存最古の用例となるであらう。ハ、クソは新撰字鏡・和名抄に見えるが、これも本点を最古例と認めてよいであらう。

語法面では、古代の助詞イ、推量の助動詞ケムの用法が注目される。

［イ］　魔蠎我心（巻第二）

摩訶倶絺羅〔与〕姉舎利論議〔不〕如（巻第一）

［ケム］　問人言、我姉生子、今在何処（巻第一）

何れも平安初期の古点に特徴的に見られる現象である。

字音の注記には、「鞞侈遮羅那三婆那」（巻第二）、「臓－酢」（巻第一）、「修妬路法蔵」（巻第三）、「憊」（巻第一）、「剖」（巻第二）のやうに、仮名に「一反」を附して注記する場合が多い。言ふまでもなく反切表記を転用して字音注の意を表したもので、類音表記として「尼婆蹉衢多羅」（巻第一）、「毒剌」（巻第一）、「孜茂」（巻第二）、「乳－糜」（巻第三）など、漢字一字に「反」を添へたものと同類である。この他「循似均反順音」（巻第一）「陥甜諂反」（巻第三）「創所當反」（巻第二）などの反切表記も見出される。尚、

陂池江河尽皆嬈－濁（巻第二）

において「嬈」をケウと注したのは、恐らく誤読であつて、唐写本切韻（切三）に「擾」と同音で「而沼反」、王仁煦切韻（王一）に「而招反」とあり、ゼウとあるべき所を、旁の「堯」に惑かれたものであらう。

巻末図版三に示す大智度論巻第二（唐経第五号）の解説を行ふと次のやうになる。

行間並に上下欄外に白書の訓点が見られる。平安初期（九世紀）の終頃の加点で、ヲコト点は第一群点（星点が左下から右廻り四隅テヲニハとなるもの）に属する。筆跡が淡くて判読は容易でないが、「創」に「ス〆」（キズ）、「防」の上欄外に「呆十ク」（ホソグ、「フセグ」の音転形）などの和訓、「刮」の上欄外に「故滑反」などの字音注が認められる。

この他、今後調査を更に進める機会に恵まれるならば、他にも有益な国語資料を発見確認する見込が多からうことを期待するものである。

二、央掘魔羅経四巻の古点（巻頭カラー図版1・2　巻末図版一・二）

央掘魔羅経四巻は劉宋求那跋陀羅の訳に係り、嘗て凶賊であつた央掘魔羅が仏により教化せられたことを説いた大乗経典である。本経は「神護景雲二年御願経第七二号」として登録された全四巻の完本である。巻子本装、奈良時代の写経で、料紙には茶色がゝつた黄麻紙を用ゐ、墨界を施し、

原表紙を有する。表紙には竹を立て、赤漆塗の新補軸を附す。紙高二七・五糎、界高二一・〇糎、界幅二・一糎、一行十七字、一紙二十七行、一紙長五六・七糎を算する。

四巻の内、巻第一・二の両巻に亘つて白書の注記が見られる。平安極初期の加筆であつて、全部漢字音の注であり、和訓・訓読の注記は一つも見出されない。これは、全文を字音で直読した跡を示すものであるが、このやうな種類の点本は、平安時代全体を通観しても、その例は極めて少数であり、本書は、その数少い例の一つであり、しかも現存最古の資料であつて、国語史上からは言ふまでもなく、中国語音史上から見ても、重要な文献といふべきである。

畳符	ン	ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
		和	良	也		ハ	奈	七	佐左	可丁	阿
	リ	井	リ		ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ
			リ		三	非比	尓	知矢千	四之	木毛	伊
	給		ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ
			儿	由	厶元				夏	口久	宇宀
	奉	エ	レ	江	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	衣
		恵		江	女	乀	根		世	介	
	事	ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ
		乎		与	毛母			止ト	曾之	其	

第四図　聖語蔵央掘魔羅経古点所用仮名字体表

本書の施点は、全体として必ずしも精しい加点とは言へないが、白点は相当に明瞭に解読し得るものであり、その仮名字体が万葉仮名を主としてゐること、その字体の大きさが大形であることなどから見て、訓点資料の中でも、最古の時期に属し、弘仁年間（八一〇―八二四）を下るものでないことが推察される。又その字音の内容は、所謂「呉音」の系統に属するが、表記面等では、後代のものに比べて古色を存する所が多い。

本書の白点については、既に春日政治博士の優れた研究「聖語蔵本央掘魔羅経の字音点」（「古訓点の研究」所収）が公にされて居り、よく全貌を紹介し研究を尽されてゐる。博士の調査は非常に周到なもので、

殆ど間然する所もないが、一二蛇足小見を加へて、私が認め得た仮名字体（第四図）と、字音の全用例とを、前後の語句・文脈を若干含めながら、次に記載することとする。

［巻第一］ (3)（原本第三張の意、以下同断）素曽歯　(3)膝七脯用　(4)詳生行七歩　(9)滋四法ム（？）（春日政治博士は「滋」の左傍に「深」ありとされるが、認め得なかった）　(14)洲渚初際　(16)鞠其口育　(17)寒暑干（「寒干暑」の誤か）　(17)為諸瀏ヘ宇溺三悪　(17)一歳嬰伊（？）阿宇兒　(18)振手遠擲丁　(18)腹行卅九旋千　(18)遶根宇旋善多匝　(19)无倫匹比木　(19)波斯匿ホ口王　(19)綵左イ女眷属　(19)神威振新懼口　(19)辭白地　(20)千力士戦世ホ　(20)乃至塩延ム油　(21)猶如虵翼由久覆於虚空　(22)活果矢反命（春日政治博士「反」ナシ）　(22)如折説牙象

［巻第二］ (2)蚊ー網（音合符あり）　(2)凶□□暴衆（春日政治博士なし）　(2)蛍永火　(3)清浄柔耎奈ホ足　(2)塵水所不汙和　(3)自称誉与　(3)蚊ー網　(3)左脚可久　(3)金翅之鳥王　(3)摩醯化首羅神　(3)歯之白　(5)臭首拘　(5)祇義園　(5)屣四反（春日政治博士「止反」）履　(5)遭左宇苦難　(7)塗右辟非　(8)哀阿イ哉　(8)蛾可（？）ー投　(8)如拇毛指　(9)粳口（谷？）米　(10)无有慙世ム（春日政治博士「坐ム？」）愧　(10)猥恵ホ（？）猴侯（？）　(10)其心躁草（？）動　(10)鵂口（春日政治博士「休」）鳥　(10)弾七ホ指　(11)歴リ阿久事　(11)御象佐宇　(12)住如瓶平中　(13)筋斤骨　(13)方便留ル舎利　(14)一切資之生具　(14)若在屠ト膾恵舎　(14)法応強奪達（？）（或いは「当」か）取シ口（春日政治博士「ユ」）　(15)突止矢吉羅　(14)見雹ハウ生忘想　(14)不久悉融由宇消　(14)濫見无懐餘真宝　(15)川竭可矢瓶无水　(15)軽蔑女矢諸仏子　(15)縦意肆凶暴母宇　(15)卒ㄨ矢聞猛虎気　(15)遊歩縦鳴命吼　(16)断截切食衆生　(16)大地悉洞ー然（合符）　(16)示現如師旅千（「旅」を「旋」と誤れるか）　(16)令入芬介子中（「芬」を「芥」と見てその音として「介」と注せるか、或いは「芬」の「分」の字画を「介」と訂せるか）　(16)実无所傷生　(16)雄猛命如汝等　(17)世間極豊壊ホ阿宇　(17)常慕ム修正法　(17)不習戯幻術頁矢　(17)務ム誦諸経律　(17)遠酒離博奕也久　(17)雄桀千悪如文殊　(18)或有慳イ治差　(19)第一極卑美（？）鄙　(19)頭目血□（春日政治博士は「決」とせらる）髄脳　(19)積骨踰七□須弥（春日政治博士は「須弥」に「世界」と注せりと認めらる）　(19)来従索昔子食　(19)如欲食与渠□（「呆」か、春日政治博士は「去？」）　(20)我受用草屣リ（「屣」を「履」と誤れるか）　(20)剪千爪（春日政治博士は「爪」に「左宇」の注ありとせらる）　(21)若於聾リ宇人中示現作聾（下の「聾」字にも注有る旨の符号あり、この字も上の「リウ」の音注に応ずるか）　(21)其誰水堪任見　(27)八声大宣唱生　(21)以為高広牀生　(22)惣持為園苑乎ホ　(22)汝今当受不歌儛ム戒　（以上）

右の内、巻第二の第十七張に在る「千悪」の二字は、明に「桀」字に注有る旨の符号があり、第二字も「恵」ではなくて「悪」であつて、

「桀」字の音注チアクの表記と認められるものである。春日政治博士は「文殊」に対して「千恵(チエ)」の意味の注があるとされるが、この点は多分小見に拠るべきものと考へる。

仮名字体は第四図に示した通りであるが、春日政治博士の表に見える、去(コ)、坐(ザ)、二(ニ)、ュ(ュ)の諸体は、未だ確認し得ないでゐる。又、他方、「ウ」(ウ)、「ラ」(カ)などを一往別字体として併記して示した。字音の内容については、春日政治博士の説かれた所に尽きてゐるが、呉音系の字音であることは、

嬰伊阿宇　遶根宇　歴リ阿久　留ル　蔑女矢　壌ホ阿宇　慕ム　桀千悪

菀乎ホ　儛ム

などから知られる所であり、又、拗音表記に「イ列音＋ア」を用ゐた例

溺三悪　嬰伊阿宇　歴リ阿久　桀千悪

などは、平安中期以降には稀な、平安初期の特色を示したものである。又、誤読と思はれる、

匹比木　旅千反　履リ

などの例も、当時の字音研究の一面を示すものであらう。又、二字を「ー」で繋いだ合符の存在することも、併せ注意せらるべきことであらう。

(附記)　本稿を草するに当り、大坪併治博士及び小林芳規博士の御調査から御教示を受けた。併せて感謝の意を表し奉る。

(東京大学教授)